

伊那市立長谷中学校(長野県) 標語作成者:後藤 優空さん

地域に愛される学校へ!子どもたちの未来に向けて

★複合的な教育を通じ生徒の思いを形に

応募のきっかけは、長野県教育委員会経由で届いた募集チラシになります。三年生技術分野の情報の技術のまとめとして、学習内容と世の中の出来事とをつなげて個人的視点で考える学びを追求している中で今回の募集が目にとまり応募しました。標語は、技術分野の学習に留まらず国語など他教科の学びと結びつけながら短い言葉に要約し表現するため、生徒が言語化の中で自分自身の考えを表に出しやすく、気づきや学び、自己表現の場としても良い手立てだと思えます。

★標語を手段として生徒の成長をサポート

本校では、講師を招いた情報モラル講演会や「SNSにおける言葉の使い方」「個人情報の取り扱い」「著作権の理解」などをテーマに、生徒同士が意見交換しつつ学ぶ場としてのワークショップを開催しています。技術分野はテクノロジーについて学ぶ中に著作権や表現の問題があり、相互に関係し合う環境にもあります。現代の生活に欠かせないテクノロジーの良い面と危険性を踏まえながら「この人がこうなってくれたらいいな」「こんな風に使ってくれたら安心安全だな」と、テクノロジーの先にある相手を考える力を育み、また、これまでの学びや体験を自分自身の生活に結びつけてもらうための一つの手段として、今回は標語応募を活用しました。

★生徒を尊重し、成長するための教育をめざして

本校は、「精神力の強い何事にも耐え得る若人たちを育てる」を使命に掲げ、また、「中学生の力で地域を元気に!」との思いを持ち日々活動しています。生徒の力を伸ばすためには、教える側も従来の教え方を見直しより効果的な方法を探し続けるべきですし、何事も大人の都合で決めるのではなく、生徒自らが考え判断し、行動する力を育むことが大切だと思います。そのためには「テクノロジーを安全に使いこなすスキル」や「思考力や判断力を通じて自らの行動に結びつけるための教育」が欠かせません。この観点からも、標語作成活動は生徒の当事者意識と創造性を高める絶好の機会であると感じています。



信越総合通信局長賞



やめとけよ そのワンタッチ 大丈夫?

富山県立砺波高等学校(富山県) 標語作成者:永田 悠登さん

生徒が考える力を育み、県内最先端の情報教育校へ

★教科書に留まらない情報教育の実践

毎年応募をしていますが、標語を作成する過程で「情報の正否」「適切な行動」などを考えることで、教科書では伝えきれない要素を補うことができ良い施策だと感じています。もちろん、授業を通して教科書の内容を念入りに教えることも必要ですが、情報リテラシー教育はそこに留まることなく指導すべきだと思います。限られた時間の中で、生徒が立ち止まり深く考えるための良い機会でもあることから引き続き取り組んでいきたいと思えます。

★様々なコンクールを活用し、学びの機会を創出

本校は、情報の授業を二年生で行っており、標語作成も情報の授業に合わせ二年生の冬休みの課題として取り組んでいます。情報のカリキュラムは複数の科目に細分化されているため、授業の中ですべてを網羅するのは困難であり、補完も兼ね様々なコンクールへの応募を活用するなど、年間を通して教えることを重視し取り組みを進めています。

★成功体験を通じ、情報モラル教育の底上げに貢献

今回はGoogleフォームを利用し代表作品の選考を行いました。投票の場で「よく考えたね!」「絶対にこれだ!」など生徒の意見が飛び交っていました。「友達の発想力を認める」「自分の考えを主張する」といった瞬間、生徒は多少なりとも情報モラルや情報セキュリティを意識しているため、取り組みの有意義さを実感しています。また、生徒が「楽しみながら学んでいる」ことが印象的でした。今回、北陸総合通信局長賞を受賞し表彰やインタビューをいただくなど大きな成功体験となりました。今回のような取り組みを通じ、本校が県内最先端の情報教育校となり富山県全体の情報モラル教育の底上げに寄与できればと考えています。



北陸総合通信局長賞



「笑」だけじゃ すまされないよ その言葉



静岡県立掛川特別支援学校御前崎分校(静岡県)

標語の取り組みを通じた意識向上と教師生徒の新たな関係

★標語づくりで育まれる生徒のリスク意識

当校は、昨年に引き続き「東海総合通信局長賞」を受賞しましたが、本取り組みを通じ言葉だけではなく行動に繋げる意識が大きく高まったと感じています。例えば、生徒に動画を見せ問題提起すると「携帯のスクリーンショットを撮る」「信頼できる人に相談する」といった回答がすぐに出るようになり、また、写真投稿についても「個人情報漏えい」「肖像権」などリスクの部分まで考えられるようになりました。

★「生徒と生徒」「教師と生徒」間の対話が深化

入賞の効果を感じる部分では、授業時など教師が一方向的に話をするのではなく以前にも増して対話を重視するようになりましたし、生徒においても教師から言われるまで待つといった受け身の姿勢ではなく「SNSについてどう思う?」など生徒同士でディスカッションする場面が増えたと感じています。デジタルネイティブ世代らしくタブレット端末の共有機能やデジタルホワイトボード機能など、アプリを積極的に活用した意見交換も活発に行われるようになりました。

★自由な発想を引き出すためデジタルツールを活用

標語づくりの際、紙ではなくGoogleのアンケート機能を利用しています。これにより生徒は何度でも記入できますし、文字を書くのが苦手な生徒もタブレットを使い簡単に入力できます。また、周囲を気にせず自分の思いを自由に書けるのも大きなメリットです。出来上がった作品は、授業の中で発表・評価することで生徒の「やる気」が高まる好循環が生まれ、さらに、デジタルツールを使うことでデータが残り、授業の振り返りにも活用することができとても便利です。



東海総合通信局長賞



気をつけて 一生消えない その投稿

神戸学院大学附属高等学校(兵庫県) 標語作成者:宮下 瑛奈さん

個性と可能性を育み、社会貢献できる人材の育成をめざして

★様々なコンクールを活用し、生徒の成長を促進

本校の取り組みは、2001年に一人一台の端末を導入して「生徒の発表経験の増加と表現力の向上」や「卒業後にリーダーシップを発揮できる人材の育成」を目指し、生徒作品を様々なコンクールに応募したのが始まりです。生徒が「情報社会に参画する取り組み」として活用しており毎年たくさんの作品が賞をいただいています。標語においても「総務大臣賞(個人部門)」「近畿総合通信局長賞」(2度目)などを受賞しています。取り組み時には「まずはやってみる」ことを意識して指導しています。生徒自身が「昨年はこうしただけ、今年はこうしてみよう」と自分なりに考え、学校生活で得た知識や経験とリンクさせながら少しずつ成長していくことが大事だと考えています。

★標語の取り組みを通じて、生徒の気づきや探究心を刺激

標語の取り組みでは、幅広いテーマから生徒自身が一つを選ぶ過程で「気づき」が生まれます。例えば「歩きスマホ」に関する作品を作成している中で「あれっ、自分もやっているな。気をつけないと」と感じることに意味があり、生徒に考えるきっかけを与え探究心を刺激します。中学・高校の年代では、授業で習うことと生徒自身の経験が紐づかず教科書の中だけの話になってしまうことがあります。取り組みを通じた生徒の成長を期待しています。

★未来を見据え、教育から広がる社会貢献をめざして

本校は、一人一台というICT環境のパイオニアです。今ではその学習利用は当たり前になっていますが、一歩進んだ活用を考えたときそれは「社会貢献」だと思います。本校は、生徒が夢を見つけ「理想とする自分」になる夢を叶えるために「全力で取り組める環境」を整えています。標語の取り組みは、生徒自身の「啓発」だけではなく「洗練された言葉づかいのトレーニング」「知識のまとめと表現」「情報社会に主体的に参画する態度と意識の醸成」、さらには世の中に役立つ「社会貢献」という多くの点において適していると思います。私たちは、これからも切磋琢磨しながら活動の輪を広げ、盛り上げていけるよう取り組んでいきます。



近畿総合通信局長賞



SNS 優しさあれば 憂いなし